

1967年（掲載誌、出版元不明）

学習指導の効率化

矢 口 新

I

学習指導の効率化を考えるには、まず学習指導という概念の切りかえが必要である。あるいはセンスを切りかえるととってもよい。これについて筆者におもしろい経験がある。外国の留學生が日本の大学を批評することばで、日本の大学は教授の話が多くて、勉強する時間がないというのをかなりしばしば聞かされることである。つまりノートばかりとらされて、自分で、頭を使って考えたり、作業したりする時間がないというのである。日本の學生は大学で教授から話を聞いたら、それで勉強したつもりになっているが、留學生はそれは勉強ではないと思っているのである。

これはなにも大学生ばかりではない。日本人の教育観の中に多分にある考え方である。教育にたずさわる人たちにも、とかく話をしてノートをとらせれば、教育をした、勉強させたことになると思っている人は多いのである。これはいわゆる一斉授業、ながい間実行しつづけてきた集合教育の中で知らず身についたセンスなのであろう。

生徒の頭脳を活動させるという考え方は日本の授業には確かに少ない。これは教育というものは、生徒にわからせることだという考え方と裏腹のものである。話をしてわかったかと聞いて、わかったといえば、それで教育は終わるというセンスである。しかしこのわかることを目標とした教育はどれだけ生徒の頭脳を発達させたことになるだろうか。なるほど生徒がわかったと思うには、先生の話聞くということに頭をはたらかしている。しかしそれでできるようになったかと考えてみるとどうだろうか。つまり先生とおなじように、自分で話をするように、自分の頭で考えていくことができるようになったかということである。こう考えると、話を聞いてわかったと思ったぐらいの段階ではまだ自分でできる段階になっていない。これだけでは、まだ生徒の頭脳がのびたことにはならないのである。

つまり話を聞かせるという場面では、生徒の頭脳ののびは少ない。つまり学習指導の効率は低いということである。うらからいえば生徒に自分で頭脳行動をさせる場をつくらなければならぬということである。

II

生徒に活動させる、行動させるということを考えると、表現活動ということがすぐ頭に浮かぶ。表現活動というのは、広い意味で、問答というものもそうである。ディスカッションというのがそうであるが、そういうくふうは日本でもかなりなされている。しかしこの場合には何十人の集団

というものを相手にしていく教育の伝統があつて、問答などを行なつてもごくわずかの生徒を相手にして行なう結果になっている。そうなると、問答のラインからはずれた生徒は遊ぶということになる。ディスカッションなどもそういうことが多い。

小集団学習というのが考えられているのは、そういう大集団の場面で多くの生徒の活動を促すことが無理なのを考えてのことであろう。しかしこの場合も、日本的な教育の欠陥である生徒を行動させるという考え方の欠如がみられる。それは問答にしても、ディスカッションにしても、ひとりひとりが頭脳をはたらかすというプロセスがたいせつなのであるが、そういうひとりひとりに活動をさせることが忘れられて、全体としての結論が出ることのほうに注意がむく。いわば結果主義なのである。よい結果が出ればよいことになる。しかし教育は、ひとりひとりがよいプロセスをふんでいるかどうかである。プロセス主義でなければなるまい。

日本の教育がとかく結果主義にながれて、プロセス主義になり得ないのははじめに述べたわからせる教育という考え方と関係がある。結果を与えてわかつたと思うことで教育になるという考え方がある。それが生徒に話し合いをさせる場合にもでてきて、プロセスを忘れて、結果を求めることになるのである。

もう一つ重要なことは、ひとりひとりの生徒をのばすということが忘れられていることがある。集団としての授業の進行を考えることになると、どうしても反応のおそい生徒は忘れられがちになる。かまっていたは、全体として進捗がおくれると考えるわけである。そこに能力差をどうするかという問題が起こってくるのである。

III

能力別指導というのも学習指導の効率化をはかる重要な考え方であるが、わが国ではこれがうまく定着しない。それにはそれ相当の原因があるのである。生徒はそれぞれの時点で能力に差があることは事実であるが、その能力の差が日本では、生まれつきすぐれた人間と能力の低い人間の差だというように考えている。能力別学級などをつくると、テンションを起こすのは、そういう能力別が人間の質の区別をしていると考えられるからである。

教育する側にこのへんの考え方がはっきりしていない。第一に能力別に分けても、全体として到達するレベルはまったくおなじに考えている。つまりみんな一せいに横隊分列行進をやって歩かせているようなものである。そういうわくの中で、能力別に組み分けして、何をしようとしているのであろう。進捗をかえてもよいということがなければ、能力別などというのは意味をなさないのである。

もう一つ能力というのをもっと多面的な角度から見るのがなくてはならないのであるが、それが現在の教育の内容・方法とも関連して一色の能力しか見られていない。せんじつめれば、記憶能力とでもいうべきであろうか。これには詳しい説明が必要であるが、紙面がないので簡単に述べるしかない。つまりテストで成績をみて能力を区別するが、これはだいたい一色の能力なのである。できる生徒はだいたいどの教科もできるなどという。それがけつきよく素質につながって、生まれつきだ、などという考え方となる。どれもみな実は同じ能力をみているのに気づかないのである。もっと構造的、行動的能力をみたら、うんとバラエティーがでるのである。いわゆ

る創造的能力を視点においたらちがったものが見えるのである。早い話が、絵を描く、歌を歌う、ものをつくる、製図をする、ものを組み立てるなどと分けてくると、かならずしも、今成績のよいものがどれにもすぐれた能力をもつとは限らない。学科でも実験、観察、調査などということをやらせてみると、今の成績による能力とはちがった区分になる。

IV

このように考えると、現在の教育が、一定期間に、みんなおなじように、教科書の中身を理解させようといった考え方の上に立っているところに問題があるということになる。それと人間を記憶する器とみる考え方が結び合って現代の教育がつくられている。そういう場で人間をみて、能力の上下をいっている。つまり記憶の上下で、それが人間の上下になっている。これは人間を墮落させることになる。

人間の能力は訓練によってのびるのである。これも詳しい説明は紙面のつごうで省くが、われわれは脳系の行動の訓練ということをもっと考えなければならない。脳系を通信系と考えれば、脳の回路をつくるのが教育だと考えられる。脳の回路は、行動すること、つまり刺激に応じて反応することによってつくられると考えられる。具体の場において行動することによってつくられるのである。ラーニング・バイ・ドゥーイングである。ドゥーイングは、頭脳作業も含んでいる。あるものをみて自分で分析整理して構造づける、解釈するというのもドゥーイングである。他人の解釈を聞くのではない。自然や社会の学習で、実験、観察、調査などということが重視されるゆえんであるが、そういうドゥーイングである。

ラーニング・バイ・ドゥーイングについてももう一つ注意すべきは、一度やってみるというドゥーイングではないということ。日本ではわかるという考え方がつよいので、自分でやれるところまでやらせるという考え方がでてこない。一度やってみて、それでわかったと思えば、あとはよくおぼえておけということになる。おぼえるとは、何度もやって、頭脳の回路をつくることなのであるが、それが忘れられているのである。

V

さてこう考えてくると、次に問題になるのは教科書である。学習指導要領があり、それに従って教育することになっているが、実は教育の現場を支配しているのは、教科書なのである。

この点について私のアメリカに長くいる友人でまったく教育の素人が、学校で自分の子どもの勉強のようすをみて日本の教育をこう批評した。「日本の教育は教科書を教えるという性格が強いことがよくわかった。アメリカの学校の教育の本体は教科書になくて、ワーク・ブックにある。つまり子どもはしょっちゅう考え、作業させられている。その間に教科書を使っている。先生と生徒がいっしょになって、教科書をたどっているという姿はまったく見ることがない」と。

日本の教育の性格をよくとらえていると思う。日本ではワーク・ブックはなくて、テスト・ブックになってしまう。おぼえたことをテストするという形になるのである。

教科書にもいろいろあるが、総じてわからせることが書いてある。これがまちがいなのである。たとえば、中学校の社会科1年のはじめの単元をみると、「東北地方の農業は米作農業を中心とし

ている」などといった結論的なことばの連続である。これは教育観のまちがいの現われだといえよう。人間に与えてやらなければならぬのは、東北地方をみて、ここの農業はどういう農業かとみる頭のはたらかし方なのである。教科書の著作者が知っていることを生徒に与えて信じろということではない。教科書がこうなっているから、教師はそれを解説することになる。その解説も前に述べたように、何十人かに話をするという場で行なわれるから、生徒に材料を与えて、自分で頭をはたらかせていくという指導にならない。これでは生徒の能力をのぼしてやることにならないであろう。

VI

結論を与えるという教科書の性格がかわらなければ、あれもこれもと、教科書の中身は盛りだくさんになって、小型百科事典の如きものになるであろう。教材の精選という声が出てきているが、もっともなことである。しかし基本的に、いかなる能力を育てるかという考え方から教材をそろえ直すことを考えないと、言うべくして行いがたいことであろう。つまりわからせること、与えること、教科書にくみこむのでなく、生徒が考え、作業する材料を与えて、生徒の行動させるワーク・ブック式のテキストが必要であろう。今の教科書をそのままにするなら、別にワーク・ブックをつくることである。

VII

以上、学習指導の効率化を問題にして、その問題がどこからでてきたかをさぐってきた。ここまで考えてくると、学習指導の効率化をはかるには実に根の深い問題があることがわかるのである。人間観、能力観からはじまって、教育内容についての考え方、方法についての考え方、教科書、教材についての考え方、教育のシステムについての考え方、全体にわたって考え方が転換しなければならないことがわかる。いわば構造的転換である。

これを実現するには非常な努力が必要である。ただ世界的にこの問題にはたいへんな努力がはらわれているのであって、われわれは一刻もゆるがせにできない段階にあると思う。それは学習指導の効率化がすなわち人間能力の開発につながるからである。人間を育てることが、新しい目で見直され、新しい意欲でもって努力される時代がきているのである。

(生産性本部プログラム教育研究所長)